



香曾我部義則先生の今月のカルテ ③③

慢性痛とペインクリニック

■プロフィール こうそかべ・よしのり 昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に。平成16年から現職。日本麻酔学会専門医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生が、痛みの治療について分かりやすく説明してくれるコラム。第33回は、前号(11月25日号)の急性痛に続き、複雑な痛みが生じる慢性痛について詳しく説明してくれます。

痛みが長期間続き、治療が難しい「慢性痛」  
効果的な薬を見つけないにはきめ細かな服用を

慢性痛は、交感神経の過緊張による痛みの悪循環(前号)では説明のつかない複雑な痛みが生じるもので、繊維傷などによって起こる急性痛と異なります。長期に持続するため治療に難渋することがしばしばです。

1カ月以上痛みが続けば慢性痛と考える場合、3カ月あるいは6カ月以上痛みが持続する場合など、幾通りもの考え方があり、持続期間だけで厳密な定義はできません。また神経過敏、睡眠障害、食思不振、疼(とち)痛の耐性の低下、社会生活からの後退など痛み以外の症状が多く現れ、痛みそのものとは直接結びつかない精神、心理、行動などの問題を抱えることも

痛む、服が擦れても痛みます。また何かをしていても気が紛れるが、静かになり一人になると痛みを強く感じます。代表的な病気として、帯状疱疹(ほうしん)後神経痛、糖尿病性ニューロパチー、三叉(さんさ)神経痛、カウサルギリ、幻視痛、脳卒中後の中枢性疼痛、外傷後や手術後疼痛などがあります。肺の手術を受けられた術後経過は順調でしたが手術の傷跡がうずき、下着が擦れてもヒリヒリする、刺すような痛み、締め付けられる痛み、苦しきめ細かい服用が不可欠になります。

とになるのです。そのため現在では、痛みの持続期間を重要視せず①侵害受容性疼痛②神経因性疼痛(ニューロパシックペイン)③心因性疼痛の3つに分類することが一般的。①は前号で述べた急性痛の主体をなすものです。②は身体表現性疼痛障害とも呼ばれ、主に心療内科・精神科による治療が求められます。ペインクリニック領域で扱う慢性痛は、①です。発症は、末梢(しよ)う、脊髄(せきずい)、中枢のいずれの部位でも起こり、神経に機能的、器質的変化が生じ神経興奮状態が続くことで特徴ある症状が生じます。

通常の急性痛に使われる痛み止めはほとんど効果を示さず、痛みのため夜も眠れない日が続いていました。この患者さんに神経過敏を抑える薬を投与したところ70%以上の痛みが減少し、日常生活に支障をきたすことなくなりました。

神経過敏を鎮める薬は抗うつ薬、抗不整脈薬、抗けいれん薬などが主体となります。この患者さんは幸いにも効果を示す薬が見つかりましたが、これらの薬剤が効くかどうかの程度効果を示すかなど判定は難しいため、さまざまな薬を患者さんに試していただきながら治療を進めていく必要があります。同時にこれらの薬は眠気、ふらつき、便秘、口渇など副作用も強く、きめ細かい服用が不可欠になります。

詳しくは専門医にご相談ください。  
梶木病院(西花尻)  
☎(293)3335549